

6. 予防仮説（指導仮説）

本人の学級内での友人関係を改善するために、担任が中心になって指導援助に当たる。

(1) 本人に対して

さりげない声かけを通して、情緒の安定を図り、生活への意欲や目的を持たせる。また、友人を少しずつ接近させながら集団生活の楽しさを体験させる。

(2) 家族に対して

① 家庭でのS子への指示、命令を控え、本人の判断にゆだねさせる。

② 本人の気持ちを理解し、学習や進路について穏やかに話し合う雰囲気を作ってもらおう。

(3) 学年教師に対して

あいさつやさりげないかわりを心がけ、良い点があったら、小さなことでも認めてくれるよう学年に働きかける。

7. 予防援助（指導援助）の経過

〔機会を見てのさりげない話しかけ〕

・ 「疲れているようだね……」と話かけた。進路について心配しているようなので、「焦らず一緒に考えて行こう」と励ました。

・ 「日直ご苦労さん、教室、きれいに整理整頓されていたよ……」と日直の労をねぎらうと、S子はニコッとほほえんだ。

〔家庭との連携〕

・ 母親との電話連絡の際、進路に対する母親の不安やいらだちを知る。その気持ちを十分受容し、「S子も悩んでいるので、今はいろんな指示を控えて見守っては……」と提案した。

・ 個人懇談のおり、母親の努力を支えた。今後、S子が自力で進路の決断ができるように、父親を交えて穏やかに話し合うことの必要性を話した。

〔本人へのかかわり〕

・ 昼休み、担任は努めて教室にいて、生徒たちの生活を観察しながら、S子を見守った。

・ 教室に独りであるS子の話相手になってやれ

ないかと2～3人の女子生徒に、担任は声をかけてみた。「そんないきなり言われたって……」「話相手でなくてもいいから誘ったり、声をかけたりしてくれないか……」担任の意をくんで、特別教室への移動のとき誘ってくれたのをきっかけにS子は行動をともにするようになった。

・ 誘ってくれた女子と同じ学習班に、S子を入れてグループ活動をさせた。少しずつではあるが意欲を示し、進路等についても考えを述べるようになってきた。

・ 学活終了後、逃げるように帰っていたS子が、少しずつ教室に残られるようになってきた。

・ 遅刻すれすれの登校状況はすっかり改善され、昼休みなどトランプを楽しむ姿が見られ、生活への意欲が高まっていた。

〔学年教師のかかわり〕

・ 学年会の共通理解を受けて、担任及び教科担任は、S子を含めた数名の生徒に努めて声をかけ、自然な形で励ますことをした。

8. 考察

S子が不登校に至らなかったのは、担任が気づきを深め、本人の情緒の安定に努めたことはもちろん、本人を取り巻く環境の調整によって、クラス内の人間的ふれあいを図れたことによるものと思われる。以下、本事例における指導援助の要点をまとめてみる。

(1) 担任が、S子の気持ちを受け入れ、さりげない話しかけや励ましに努めたことにより、本人の情緒の安定が図られた。

(2) 友人を求めながら積極的に友人関係が作れないS子に、級友を近づけたことで、自然な形での対人適応が図られた。

(3) 母親のS子への心配を受容することによって、家族で穏やかな話し合いを持つ余裕が生まれ、本人の進路に対する自主性が養われていった。

(4) 学年会での「さりげなく、自然に」という共通理解のもとに、S子へのかかわりが深められたことは、本人の励みになって行った。